

(4) ブドウ
ア 殺菌剤

農薬名	成分名	FRAC コード	適用病害名									注 意 事 項
			黒 と う 病	晩 腐 病	褐 斑 病	さ び 病	灰 色 か び 病	う ど こ 病	べ と 病	枝 膨 病	ゆ 合 促 進	
アミスター10フロアブル	アゾキシストロビン	11	◎	◎	◎	◎	◎		◎	◎		
アリエッティC水和剤	キャブタン・ホセチル	M04・P07	◎	◎			◎		◎			
イデクリーン水和剤 園芸ボルドー	塩基性塩化銅・硫黄	M02・M01	◎	◎	◎	◎		◎	◎			連用により葉の葉害事例がある。
インダーフロアブル	フェンコナゾール	3	◎		◎		◎	◎				
エコシヨット	バチルス・スバチルス	BM02					◎	◎				
エトフィンフロアブル	エホキサム	22							◎			
オーシャインフロアブル	オキサコナゾールフル酸塩	3	◎		◎		◎	◎				
オーソサイド水和剤80	キャブタン	M04	◎	◎	◎		◎		◎	◎		
オマイト水和剤	BPPS							◎				
オラクル顆粒水和剤	アミスフロム	21							◎			
オロンディスウルトラSC	オキサチアピロリン・マンジプロパミド	49・40							◎			果粉溶脱・汚れを生じるおそれがあるので、幼果期(小豆大)以降は注意して使用する。
オンリーワンフロアブル	テブコナゾール	3	◎	◎	◎	◎	◎	◎				
カンタスドライフロアブル	ボスカリト	7					大粒					大粒:【大粒種のみ登録】
カンパネラ水和剤 ベネセット水和剤	ベンチアバリカルブ・イソプロピル・マンゼブ	40・M03	◎	◎					◎			
カナメフロアブル	インビルフルキサム	7	◎		◎	◎	◎	◎				
キノンドーフロアブル ドキリンフロアブル	有機銅	M01	◎						◎	◎		
クプロシールド	塩基性硫酸銅	M01							◎			
ゲッター水和剤	ジエトフェンカルブ・チオファネートメチル	10・1					◎					
ケンジャフロアブル	イソフェタミド	7	◎		◎		◎	◎				
コサイド3000	水酸化第二銅	M01				◎			◎			
ザンプロDMフロアブル	アメクトラジン・ジメトモルフ	45・40							◎			
ジマンダイセン水和剤 ペンコゼブ水和剤	マンゼブ	M03	◎	◎	◎	◎			◎			
ジャストフィットフロアブル	フルオビコリト・ベンチアバリカルブ・イソプロピル	43・40							◎			
スイッチ顆粒水和剤	シプロジニル・フルジロキサニル	9・12		◎			◎					

農薬名	成分名	FRACコード	適用病害名									注意事項
			黒とう病	晩腐病	褐斑病	さび病	灰色かび病	うどんこ病	べと病	枝膨病	ゆめ促進	
ストロビードライフロアブル	クレシムチル	11	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎		
セイビアーフロアブル 20	フルジチニル	12		◎				◎				果粉溶脱の恐れがあるため小豆大～袋掛けの期間は散布しない
ダイナモ顆粒水和剤	アミスプロム・シモキサニル	21・27		◎						◎		
トップジンMペースト	チオファネートメチル	1									◎	塗布
トレノックスフロアブル チオノックスフロアブル	チラム	M03	◎	◎	◎			◎		◎		果粉溶脱・汚れを生じるおそれがあるので、幼果期～袋掛けまでの散布は注意して使用する。
トリフミン水和剤	トリフルゾール	3	◎		◎				◎			
ネクスターフロアブル	イピラサム	7	◎		◎			◎	◎			果粉溶脱の恐れがあるため小豆大～袋掛けの期間は散布しない
バッチレート	有機銅	M01									◎	塗布
バスワード顆粒水和剤	フェンハキサト	17						◎				
ピクシオDF	フェピラサシ	17						◎				
ファンタジスタ顆粒水和剤	ピリベンカルブ	11	◎	◎		◎	◎					ホクシアクレート系剤と交差耐性の事例が報告されているので、同系統の連用は控える
フルーツセイパー	ペンチピラト	7	◎	◎	◎	◎	◎	◎				
フルピカフロアブル	マニピリム	9						◎	◎			
プロパティフロアブル	ピリオフェン	50							◎			
フロンサイドSC	フルアジナム	29	◎	◎				◎		◎	◎	
ベトファイター顆粒水和剤	シモキサニル・ベンチアハリカルブイソプロピル	27・40								◎		
ベフラン液剤 25	イミクタジン酢酸塩	M07	◎	◎	◎						◎	
ベンレート水和剤	ベノミル	1	◎	◎	◎			◎	◎		◎	
ボトキラー水和剤	バチルススプアチス	BM02						◎				
ホライズンドライフロアブル	シモキサニル・ファモキサト	27・11	◎	◎	◎					◎		
ポリオキシシンAL水溶剤	ポリリキシン複合体	19	◎					◎	◎			
ポリベリン水和剤	イミクタジン酢酸塩・ポリリキシン	M07・19	◎	◎	◎			◎	◎			
ボルドー液（硫酸銅・生石灰）	塩基性硫酸銅	M01	◎							◎		
ムッシュボルドーDF	塩基性硫酸銅	M01				◎				◎		
ライメイフロアブル	アミスプロム	21								◎		
ランマンフロアブル	シアゾファニト	21								◎		
リドミルゴールドMZ	マンゼブ・マラキシルM	M03・4								◎		
レーバスフロアブル	マンジプロパニト	40								◎		
ロブラール水和剤	イプロジホ	2	◎					◎				

農 薬 名	成 分 名	FRAC コード	適 用 病 害 名									注 意 事 項
			黒 と う 病	晩 腐 病	褐 斑 病	さ び 病	灰 色 か び 病	う ど こ 病	べ と 病	枝 膨 病	ゆ 合 促 進	
ヨネポン水和剤	ノニフェノールスルホン酸銅	M01								◎		被覆期間中は、高温により葉が退色する薬害事例がある。
ICボルドー48Q	塩基性硫酸銅	M01								◎		

(4) ブドウ
イ 殺虫剤

農 薬 名	成 分 名	I R A C コード	適 用 害 虫 名											注 意 事 項		
			チ ヤ ノ キ イ ロ ア ザ ミ ウ マ	ア ザ ミ ウ マ 類	ト ラ カ ミ キ リ ム シ	ブ ド ウ ス カ シ バ	ス カ シ バ 類	コ ウ モ リ ガ	コ ガ ネ ム シ 類	ア カ ガ ネ サル ハ ム シ	ハ ダ ニ 類	カ ン ザ ワ ハ ダ ニ	ナ ミ ハ ダ ニ		カ メ ム シ	
ア ク タ ラ 顆 粒 水 溶 剤	チアトキサム	4A	◎													
ア グ ロ ス リ ン 水 和 剤	シヘルメトリン	3A	◎						◎							
ア デ ィ オ ン 水 和 剤	ヘルメトリン	3A	◎						◎							
ア ド マ イ ヤ ー 水 和 剤	イダグプロット	4A		◎												
ア ル バ リ ン 顆 粒 水 溶 剤	ジノテフラン	4A	◎		◎										◎	
エ ク シ レ ル S E	シアントラネリブロール	28		◎					◎							果粉溶脱の恐れがあるため大豆大～袋掛けの期間は散布しない
オ マ イ ト 水 和 剤	BPPS	12C										◎				
ガ ッ ト サ イ ド S	MEP	1B						◎								
コ テ ツ フ ロ ア ブ ル	クロルフェナピル	13	◎						◎			◎	◎			
コ ル ト 顆 粒 水 和 剤	ピリフルキサゾン	9B	◎													
コ ロ マ イ ト 水 和 剤	ミルベメチン	6									◎					
ス カ ウ ト フ ロ ア ブ ル	トラロメトリン	3A	◎						◎							コガネムシ類成虫
ス タ ー マ イ ト フ ロ ア ブ ル	シエリピラフェン	25A									◎					
ス ミ チ オ ン 水 和 剤 4 0	MEP	1B			◎	◎			成	◎						成:【成虫に適用】
ダ ン ト ツ 水 溶 剤	クロチアジソン	4A	◎		◎				◎						◎	
ダ ニ コ ン グ フ ロ ア ブ ル	ピフルブミド	25B									◎					
ダ ニ サ ラ バ フ ロ ア ブ ル	シルメトフェン	25A									◎					
デ ィ ア ナ W D G	スピネトラム	5		◎												
テ ッ パ ン 液 剤	シクエリブロール	28	◎						◎						◎	
ニ ッ ソ ラ ン 水 和 剤	ヘキシチアゾクス	10A									◎					
パ ダ ン S G 水 溶 剤	カルタップ	14	大粒				大粒									大粒:【大粒種のみ登録】
ピ ラ ニ カ 水 和 剤	テブフェンピラト	21A									大粒					大粒:【大粒種のみ登録】
フ ェ ニ ッ ク ス フ ロ ア ブ ル	フルベンジアミド	28					◎									
ポ リ オ キ シ ン A L 水 溶 剤	ポリキサシ複合体	19	◎								◎					
マ イ ト コ ー ネ フ ロ ア ブ ル	ピフェザート	20D									◎					

農 薬 名	成 分 名	I R A C コード	適 用 害 虫 名										注 意 事 項				
			チ ヤ ノ キ イ ロ ア ザ ミ ウ マ	ア ザ ミ ウ マ 類	ト ラ カ ミ キ リ ム シ	ブ ド ウ ス カ シ バ	ス カ シ バ 類	コ ウ モ リ ガ	コ ガ ネ ム シ 類	ア カ ガ ネ サ ル ハ ム シ	ハ ダ ニ 類	カ ン ザ ワ ハ ダ ニ		ナ ミ ハ ダ ニ	カ メ ム シ 類		
モ ス ピ ラ ン 顆 粒 水 溶 剤	アセチアリト [®]	4A		◎	◎					成							成:【成虫に適用】
モ ベ ン ト フ ロ ア ブ ル	スピロト [®]	23		◎							◎						
ロ デ イ ー 水 和 剤	フェンプロ [®] トリ [®]	3A	◎														

注) 小粒種：デラウェア、シラガブドウ、やまぶどう

大粒種：巨峰系4倍体品種，2倍体米国系品種，2倍体欧州系品種，3倍体品種他

ウ 病虫害防除法（ブドウ）

（ア）黒とう病 *Elsinoe ampelina*

（防除のねらい）

病原菌は発病枝や巻きづるの組織内で越冬し、春先に雨水により伝搬する。萌芽期から梅雨期に降雨量が多いと発生しやすいが、施設栽培では雨水が遮断されるため発生は少なく、萌芽前の防除で十分対応できる。なお、本県で栽培の多い「巨峰」は罹病しやすい品種である。

（耕種的防除法）

- （1）罹病苗を持ち込まない。
- （2）巻きづるなどは入念に取り除き、処分する。
- （3）罹病部は早期に摘除する。

（イ）晩腐病 *Glomerella cingulate*

（防除のねらい）

病原菌は罹病枝や巻きづるの組織内で越冬し、春先に雨水により伝搬する。

休眠期～小豆粒期までの防除に重点を置き、例年発生の多い園では天井ビニル除去を遅らせた方がよい。

（耕種的防除法）

- （1）通風や排水を良くする。
- （2）袋掛けはなるべく早く行う。
- （3）収穫が遅れないよう、適正な結果量とする。
- （4）袋掛けは、穂軸と袋の間に隙間ができないよう丁寧に行う。

（ウ）褐斑病 *Pseudocercospora vitis*

（防除のねらい）

病原菌は枝幹に付着した分生孢子や落葉上の病斑などで越冬する。したがって越冬菌密度の低下を図るために落葉を処分し、休眠期に防除を行う。

発生期間が長いので、薬剤防除は開花前から収穫後まで必要である。また、発病後は病勢を抑えることが難しいので、開花前から袋掛けまでの生育前半の防除が重要である。特に「巨峰」では発生が多く、ビニル除去後に多発し早期落葉する場合もある。

（耕種的防除法）

- （1）落葉を処分し、粗皮はぎを行う。
- （2）密植、強せん定を避ける。
- （3）罹病葉はせん除する。

（エ）さび病 *Phakopsora ampelopsidis*

（防除のねらい）

病原菌は前年に罹病し落葉した葉で越冬し、中間宿主のアワブキなどを経てブドウに伝搬したり、ブドウの枝組織内で越冬したものが伝染源になる。「巨峰」や「デラウェア」で発生が多い。薬剤防除はべと病、褐斑病等と同時防除できる剤を選択する。

（オ）灰色かび病 *Botrytis cinerea*

（防除のねらい）

病原菌は土中の菌核やその他の有機物上で越冬し、開花期前後に曇天が続く時に多発する。

薬剤防除は開花期前後に重点を置くとともに、この時期に園内が過湿にならないようにする。

なお、耐性菌を出さないために、同一系統の薬剤の連続散布は避け、系統の異なる薬剤によるローテーション散布を行う。

（耕種的防除法）

- （1）園内の通風を図ると共に、マルチシート被覆を行い過湿を避ける。暖房機のあるほ場では開花時期に加温を行う。
- （2）開花終了後、果房に付着している花がらを早めに除去する。

(カ) うどんこ病 *Uncinula necator*

(防除のねらい)

病原菌はりん片内で越冬し、4月頃から風で飛散して伝搬する。空梅雨や夏が冷涼少雨の乾燥した年以外の発生は少ない。初発時は葉や幼果に白い粉がわずかにふりかかったように見える。

また、施設栽培では比較的発生しやすい。

(耕種的防除法)

罹病した果粒は早めに除去する。

(キ) べと病 *Plasmopara viticola*

(防除のねらい)

病原菌は前年に罹病し落葉した葉の組織内で越冬する。展葉初期～梅雨期及び秋季に比較的低温(20℃前後)で降雨量が多いと多発し、施設栽培ではビニル除去後に発生しやすい。

病原菌は気孔から感染するので、防除は散布むらのないようにする。

(耕種的防除法)

- (1) 落葉は処分する。
- (2) 園内の通風、採光を良くする。

(ク) 枝膨病 *Diaporthe sp.*

(防除のねらい)

病原菌は巻きづるや枝幹の病患部で生存して感染を繰り返す。新梢では黒色病斑、2年枝以上では節部及び節間にコブ状の膨れやかいよう状の壊死を引き起こす。雨水により伝搬し、降雨量が多い年は多発するので注意する。「巨峰」では発生が多い。

施設栽培では雨水が遮断されて発病が少なくなるので、発芽前～開花期の防除に重点を置く。

(耕種的防除法)

- (1) 罹病苗を持ち込まない。
- (2) 苗木の植栽にあたっては、温湯処理(50℃, 30～60分)を行う。
- (3) 窒素質肥料の多用を避け、過繁茂にならないようにする。

(ケ) チャノキイロアザミウマ

(防除のねらい)

果実の外観を著しく損なうので、発生初期の防除を徹底する。常発園では落花期から防除を始め、袋掛け前まで2回程度防除を行う。特に、落花後～大豆粒大期、袋掛け直前は重要な防除時期である。

多発園では後期の被害(6月下旬～7月)、特に「巨峰」などで見られる穂軸の被害を抑えるために、袋掛け後の防除を行う。

(耕種的防除法)

ブドウ園周辺のマサキ、サザンカ、ツバキなどは発生源となるので、できるだけ除去する。また、チャでの発生も多いので隣接地はチャ摘採後の飛来に注意する。

(コ) ブドウトラカミキリ

(防除のねらい)

成虫は年1回、8月下旬～9月上旬に発生する。結果母枝の節部付近の粗皮下で幼虫が越冬し、越冬部位の表皮は黒色に変色する。翌春、気温の上昇とともに幼虫は木質部の食害を始め、5～6月に枝は枯死する。

薬剤防除は、ふ化幼虫が粗皮下の浅い部位にいる秋季に重点を置く。多発園では8月下旬～9月上旬の成虫発生期にも行う。

幼虫の大半はせん定した枝の中で越冬するので、せん定枝を早期に処分したり、黒色に変色した越冬部位を見つけて幼虫を捕殺するなどの耕種的防除と薬剤防除を合わせた総合的な防除対策を行う。

(耕種的防除法)

- (1) せん定枝を処分する。
- (2) 結果母枝や3～4年生枝にも越冬幼虫が潜んでいるので、幼虫の刺殺や食入か所のはく皮を行う。

(サ) ブドウスカシバ

(防除のねらい)

成虫は年1回、5月上旬～6月中旬に発生し、葉柄の基部や新梢に産卵する。食入初期には薬剤の防除効果は高いが、老齢幼虫には劣るので防除時期を失しないようにする。薬剤防除と耕種の防除を組合わせた総合的な防除手段を講ずる。

(耕種的防除法)

- (1) 幼虫は新梢を次々と転食するので、食入か所を見つけ次第刺殺する。
- (2) せん定枝や樹上に残存する被害枝を除去、処分する。

(シ) コウモリガ

(防除のねらい)

1世代に2年を要し、卵からふ化した幼虫は園内雑草を食べて成長する。6月頃からブドウの主枝や幹の一部を環状に食害した後、木質部に食入する。園内雑草からブドウへの移動は6～9月まで続くので、食入幼虫の早期発見と防除に努める。

(耕種的防除法)

- (1) 草生栽培園では株元付近の除草に努め、敷わら、敷草は株元から離して施す。
- (2) 6月以降園内を見回り、特に地際部の被害に注意して防除する。

(ス) コガネムシ類

(防除のねらい)

ドウガネブイブイ、マメコガネ、ヒメコガネ、アオドウガネなどが主な加害種である。近年、コイチャコガネによる被害も多い。

年1回発生するが、種類によって飛来・加害時期は異なる。従って、早期発見に努め、発生に応じて2～3回防除する。

(耕種的防除法)

少発生の場合は、行動の鈍い早朝に園内を見回って捕殺する。

(セ) アカガネサルハムシ

(防除のねらい)

成虫は年1回、3～5月に発生し、芽や新梢、新葉を食害する。大部分が成虫で越冬する。

(ソ) ハダニ類

(防除のねらい)

カンザワハダニ、ブドウヒメハダニ、ブドウサビダニ、ブドウハモグリダニなどが主な加害種で、優占種はカンザワハダニである。

(耕種的防除法)

園内への侵入を防ぐため、周辺雑草を除去する。

(タ) カメムシ類

(防除のねらい)

常緑果樹・落葉果樹共通 (4) カメムシ類の項参照。

(チ) ヨコバイ類

(防除のねらい)

フタテンヒメヨコバイ、ミドリヒメヨコバイ、スズキヒメヨコバイなどが主な加害種で、優占種はフタテンヒメヨコバイである。

薬剤に対して比較的弱い害虫で、通常は他の害虫の防除で併殺される。年によっては8～9月に多発するので、発生に注意して初期防除に努める。

(耕種的防除法)

密植を避け、園内の通風、採光を図る。